

現場を重視し、
現実の中から学んでいく

私は現在大学の総長を務めています。アカデミズムのオーソドックスな道を行ってきた人間ではありません。大学を卒業したのが、東京オリンピックを翌年に控えた昭和三十八年。高度経済成長真っ只中の非常にダイナミックな時代であり、その本流に身を投じたいと考え民間企業に就職したのです。当時の家族主義的な職場環境にも馴染み、この会社に骨を埋めたいと当初は考えていま

した。しかしその一方で自分の勉強不足を痛感する場面も多く、学生時代の勉学姿勢への反省から、もう一度大学で学び直したいという思いが募ってきました。恩師に相談したところ、「迷った時には、一歩前に足を踏み出すのが私の主義だ」と説いてくださり、就業三年目で大学に戻る決意をしたのです。折しも、戦後発足した国際連合には独立を果たした開発途上国が次々と参加してしました。それまで植民地であった国が立ち上がり、ダイナミックな経済発展を遂げ、白人によって支配されていた国際秩序の中に、多種多様

な人種、民族が加わっていく様は実に印象的でした。私にはそうした開発途上国の経済発展をテーマに、貧しい国の発展に役立つ学問をしたという志がありました。あいにく金銭的には厳しい年齢でしたが、親戚縁者からお金をかき集めてはアジア各国に赴き、地を這うように現地を歩いて研究を重ねました。特に印象的だったのは韓国とバングラデシュでした。当時の韓国はアジアの最貧国で、ソウルを流れる漢江の両岸一帯はスラムでしたが、南大門辺りへ行くと唸りを上げるよう

不安常住

拓殖大学総長 渡辺利夫



わたなべ・としお——昭和14年山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業後、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て、平成17年拓殖大学学長就任。23年より第18代拓殖大学総長。外務省国際協力有識者会議議長、アジア政経学会理事長なども歴任。JICA国際協力功労賞、外務大臣表彰、第27回正論大賞など受賞多数。著書に『成長のアジア停滞のアジア』（講談社学術文庫『新脱亜論』(文春新書)などがある。

な活気が渦巻いていました。日本が戦後の闇市から目覚ましい復興を遂げた様を目の当たりにしていた私は、この国は必ず発展すると直感して研究を始めたところ、程なく「漢江の奇跡」と謳われる経済成長が始まり、今日に至る近代化を遂げたのでした。

バングラデシュは韓国よりも厳しい貧困に喘いでいました。インドから独立したパキスタンからもう一度独立を果たしてようやく一人前の国として歩み始めたものの、その貧しさはまるで地獄絵を見るようで、人間社会の悲惨な現実を嫌というほど思い知らされました。

さらに両国の間にある東南アジアの国々、そして中国にも研究の対象を広げて築き上げてきた私の「ワールド経済学」は、現場を重視し、現実の中から学んでいくことを旨とします。そしてその原点は、「東奔西走」を信条に、日本の復興と途上国支援に奔走した恩師・大来佐武郎先生の生きざまにあります。

長らく関わってきた日本のODA（政府開発援助）は、ただ闇雲にインフラを建設するのではなく、綿密な事前・事後調査のもと、その国の経済社会に本当に役立つか否かを見極めることに腐心しました。プロジェクトが無事成功し、現地の乾いた荒地が青々とした田畑に様変わりしているのを見た時には胸を熱くしたものです。現地の人に抱擁され、感謝の言葉を述べられた感動は一生忘れられません。

真の幸福に通じる道

とはいえ、環境の劣悪な異国の地でのフィールドワークは、思いがけず大きな負担を身に強いていたようです。しばしば風土病に悩まされた揚げ句、ある年ベトナムから帰国すると酷い神経症にかかり、一年間ほとんどまとまな活動ができなくなってしまいました。

その時に出会ったのが、日本における精神医学の草分けである森田正馬博士の創始した森田療法でした。森田療法は薬に頼らず、悩みや葛藤から離れてあるがままの自分を取り戻す作業療法です。この療法の目覚ましい効果によって以前にも増して精力的に活動ができるようになった私は、森田氏の全集を精読し、高弟の高良武久氏とのご縁にも恵まれてさらに学びを深めました。この体験をもとに上梓した『神経症の時代』は、思いがけず文学賞を受賞し、ベストセラーとなりました。

私が森田療法から学んだのは「不安常住」という考え方でした。不安というものは常に心の中に住まわっているものだということです。神経症者は、不安や不快、恐怖感情にとらわれ、これを取り除くことに執着してさらに心の自由を失ってしまいます。例えばがんになることは誰もが避けたいものですが、神経症の人は必要以上に検診を繰り返してさらに恐怖心を増幅させるのです。

森田博士は、人間は「不安の器」であると説いています。このことを自覚した上で、人生の目的に意欲的に取り組む過程で、不安も自ずと解消していくことを、私は自らの体験を通じて実感しました。そして開発途上国の支援を通じて第三者に貢献すること、ひいては利他の実践こそが真の幸福に通じる道であることに思い至ったのです。以来この「不安常住」という言葉を支えに、今日まで歩んできました。

私はいま、現場で若い学生を育てることに大きな生きがいを見出しています。マニラでは現地のボランティアグループと組み、ストリートチルドレンと呼ばれる極貧の子供たちの救済活動を展開しました。また、四年前の東日本大震災の際に立ち上げたボランティアチームは、支援活動をコンスタントに継続してきたことが評価され、釜石市と救援ボランティア協定まで結びました。

それまで自分の身近なことにはしか関心なかった若者が、活動を通じて人様が喜ぶことに感動し、遅く成長を遂げていく姿を目の当たりにできるのは、教育という職業の醍醐味であり、この職業を選んだ喜びを心底実感しています。これからは彼らとともに現場に出て、活動を通じて真の幸福に至る道を伝えていきたい、日本の若者の心に変革をもたらすもたらすことを願っています。